

## 教育研究グループ「教育結果」報告書

報告日 令和 4年 4月29日

グループ名	障害児・者の 美術活動の在り方研究会	フリガナ 代表者氏名	フシミ アキラ 伏見 明
学校名 (代表者)	東京都立永福学園 (伏見 明)	電話番号	03-3323-1380
研究テーマ	特別支援学校の生徒や卒業生の優れた美術的才能の さらなる伸長に要する教育的支援の実践的研究		
研究期間	令和 3 年 4 月 1 日 開始から 令和 4 年 3 月 31日まで		
研究結果 の概要  ※詳細は別 紙により 報告	<p>障害児・者の美術活動の在り方研究会は、優れた美術的才能のある、または美術活動に強い興味・関心のある都立特別支援学校等の生徒及び卒業生を集め、美術活動に没頭できるワークショップ「自由な美術活動空間」を提供している。</p> <p>参加者の美術的センスを何の制約なく発揮できるように、多種多様な画材を準備し、それを全て見える形で並べ、自由に手に取ってふんだんに使えるようにしている。画材の種類や量も、本助成金を活用して昨年度よりもさらに拡大した。</p> <p>令和3年度は、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえながら、日程や開催方法の変更を行いながら、2回の集合型ワークショップの開催（令和4年1月8日（土）：参加者15人及び3月12日（土）：参加者11人）と、自宅等での美術活動機会が行えるよう、2月11日（金・祝）に画材の提供を行った。</p> <p>2回の集合型ワークショップは、1回当たりの参加者の上限を15人とし、5時間の開催時間内であれば、自由に来場し、作品を創作して帰ることができる形式にしている。また、自宅等での美術活動機会の提供は、当初、集合型で行う予定であった回を、感染者数が多い時期であったことから変更したものである。画材の提供を受けた参加者には、美術活動の様子を画像や映像で提供してもらって、活動の状況を把握した（参加者7人）。</p> <p>今年度も、新型コロナウイルスの影響は大きかったと言える。そもそも、15人と人数制限をしなくて済むのであれば、50人規模のワークショップを開催し、ダイナミックな展開にしたいところである。さらに、感染者数の状況により、申込者の辞退なども相次いでしまった。その中でも、単に開催を中止せず、自宅等での美術活動機会を提供に変更できたのは、幸いであった。</p> <p>参加者には、令和元年度からのリピーターも多いが、活動に参加すれば、お互いに刺激を受け合い、使った経験のない画材や色を使いだし、作風が変わっていくという様子が見られている。また、今回は、ロコミなどで新規の参加者が増え、このような自由な空間はないと喜びの感想を聞かせてくれた。</p> <p>これらのワークショップでの活動を基に、令和4年3月12日（土）にシンポジウムを開催した。障害のある人たちの美術活動を社会につなげていくことの重要性に関して、シンポジストから、それぞれの専門的見地や実践に基づく示唆を、多く得ることができた。</p>		
その他 特記事項	本研究会の研究は、都教育委員会の「令和3年度 文化プログラム・学校連携事業」指定を受けて実施した。		

# 障害児・者の美術活動の在り方研究会 研究結果報告

「障害児・者の美術活動の在り方研究会」は、優れた美術的才能のある、または美術活動に強い興味・関心、意欲のある都内特別支援学校の生徒及び卒業生に対し、創作活動に没頭できるワークショップ「自由な美術活動空間」を提供している。

令和3年度は、感染症対策の観点から当初計画していた3回の集合型のワークショップ開催を2回に変更し、残りの1回は、様々な画材を提供するが、創作は、参加者が自宅等で行う形式とした。集合型ワークショップは、本来、多数の参加者を募集し、ダイナミックに展開したいところであったが、感染症対策のため、参加者を15人に限定せざるを得なかった。しかし、参加者の活動できる時間を最大5時間とし、この時間内であれば、それぞれが参加しやすい時間帯に来て、帰ることができるようにした。このような環境の中で、参加者は、用意された様々な画材の中から好きなものを自由に選び、思い思いに作品を創作した。

本ワークショップは、3年目を迎え、多くの参加者はリピーターであるが、口コミ等で新規参加者が加わり、毎回定員を満たす、参加申し込みがあった。

また、今年度のシンポジウムは、3回目のワークショップと同時開催し、創作活動をしている傍らで、前2回の作品や創作活動の様子を映像などで見ながら行った。

## ワークショップ

### 美術創作スペース 自由な美術活動空間 ～ 全身でアートする ～

◎ 第1回：令和4年1月8日（土） 午前11時から午後4時まで

◎ 第2回：当初予定、令和4年1月23日（日）

集合型ワークショップを自宅等での取組に変更

2月11(金・祝)午後12時から午後3時までの間に来場し、好きな画材を選んでもらって配布、その他、自宅への郵送を希望する参加者には、研究会で準備した画材を送付

◎ 第3回：当初予定、2月11日(金・祝)を3月12日（土）に延期

午前10時から午後3時まで

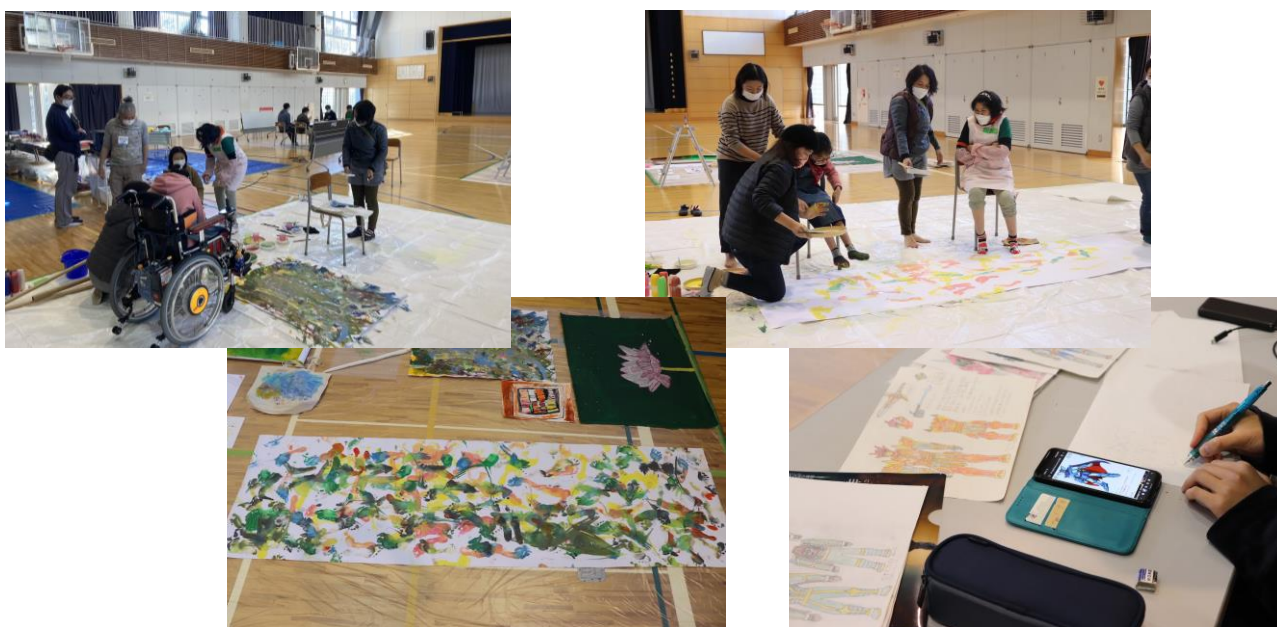
※ 各回、アーティスト・アートディレクターである中津川 浩章 氏にファシリテーターを依頼

# 自由な美術活動空間（第1回）

- 活動日時：令和4年1月8日（土） 午前11時から午後4時まで
- 活動場所：東京都立永福学園 体育館
- 参加者数：

会場校生徒	他校生徒	会場校卒業生	他校卒業生	当日欠席	合計
1人	6人	7人	1人	0人	15人

- 活動の様子：



新型コロナウイルス感染症対策のため、体育館の扉を開放して常時換気するとともに、参加者間の距離を十分にとってワークショップを実施した。

テーブルの上で、画用紙サイズの創作活動ができるスペースを10人分、比較的大きな紙での創作活動ができる場所を2カ所確保した。また、床の上で、ロールの紙を広げて創作活動ができる場所を1カ所設置した。

画材も20種類以上、特に学校教育では扱わないと思われるものを準備した。

参加者は、アクリル絵の具で特大の蓮の絵を描いたり、立ったまま壁に向かって流れるような絵を描いたり、補強材を入れながら紙粘土で生き物を作ったりと、スタッフが驚かされる豊かな発想で創作活動を行っていた。

「こんなに沢山の画材を使えるのは夢のようです。」、「授業ではこんな活動はできない。」、「また次も参加したい。」、「今日描いた絵をおじいちゃんの家飾ります。」、「こんなに自由に活動できる場所は他にはありません。」などといった感想が、参加者から聞かれた。

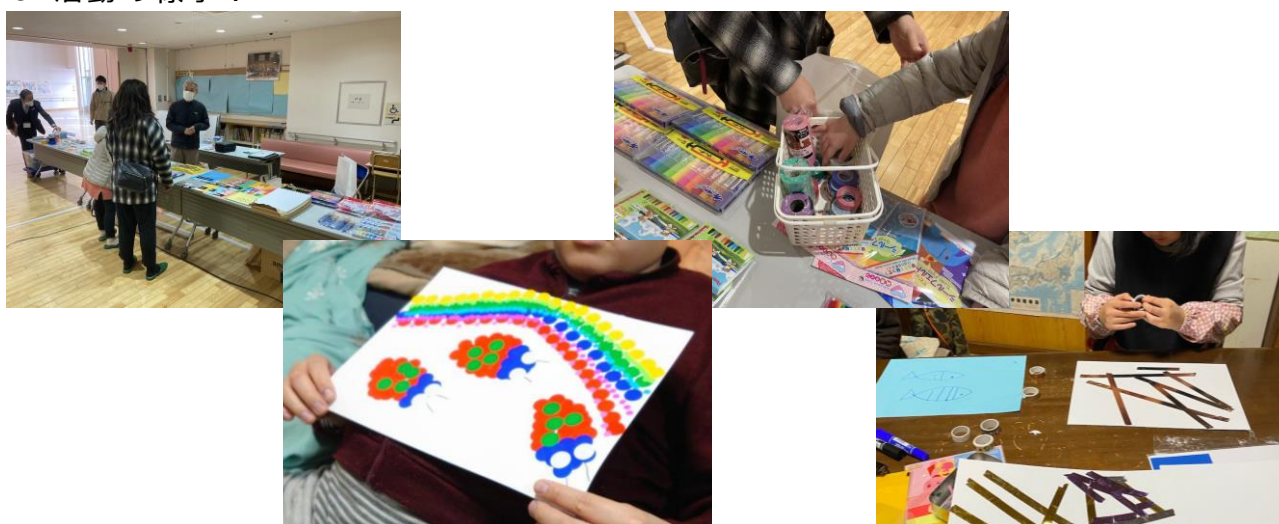
# 自由な美術活動空間（第2回）

- 画材配布日時：令和4年2月11（金・祝） 午後12時から午後3時まで
- 画材配布会場：東京都立永福学園 多目的スペース
- 活動場所：各参加者自宅等
- 参加者数：

会場校生徒	他校生徒	会場校卒業生	他校卒業生	当日欠席	合計
0人	4人	2人	1人	0人	7人

※ 感染不安や開催方法の変更等により、当初申込み者のうち8人が事前辞退

- 活動の様子：



新型コロナウイルス感染者数が急増していたため、当初1月23日（日）に予定していた集合型での開催を取り止め、2月11日（金・祝）に希望する参加者に来場して、様々な画材の中から好みのものを選んでもらった。また、来場しなかった参加者には、本研究会事務局で画材を選び送付した。これらの画材を用いて、参加者には自宅等で創作活動を行い、その活動の様子や作品を画像や動画に撮ってもらい、提供するように依頼した。画材を受け取りに来場した参加者には、できる限り普段参加者が使っていない画材が選ばれるように助言した。

第3回ワークショップ開催前までに、数多くの画像や動画が寄せられ、充実した活動が自宅等で行われていたことを把握できた。

なお、画像や映像に添えて、「普段、紙粘土を触らないが、今回、挑戦した。」、「沢山の画材があるのが嬉しくて、笑顔で作っていた」、「普段と違う親子の時間ができた。」、「何枚も何枚も描いていた。」、「友人に絵をプレゼントした。」といった意見が寄せられた。一方、「実際に集まりたかった。」、「みんなと活動したい。」という意見も多かった。



# 自由な美術活動空間（第3回）

- 活動日時：令和4年3月12日（土） 午前10時から午後3時まで
- 活動場所：東京都立永福学園 昇降口及び多目的スペース
- 参加者数：

会場校生徒	他校生徒	会場校 卒業生	他校 卒業生	当日欠席	合計
0人	5人	5人	1人	1人	11人

※ 感染不安等により、当初申込み者のうち4人が事前辞退

- 活動の様子



新型コロナウイルス感染者数は減少してきているものの、依然多い状況ではあったが、前回、「学校会場で実施して欲しい。」といった要望が多数寄せられたことを受け、通気性の優れた場所で、さらに感染症対策を十分に行いながら、創作活動を実施した。

これまでの活動の様子を基に、参加者の好みや特性を踏まえ、新たな挑戦もできるように画材を用意するとともに、活動場所の中を移動しやすいように会場設定するなどの準備を行った。参加者は、前回の自宅等で描いた絵を持ってきて見せ合ったり、他の参加者が描いている作品を見て回ったりして、互いに刺激し合いながら活動していた。

一方、学校まで来たが、活動場所が体育館ではなくなっていたことに大変戸惑い、校内に入れず、帰ってしまった参加者がいた。このことについて、障害特性への配慮が足りなかったと大いに反省した。

「やはり、活動の場があるのは嬉しい。」、「今日はたくさんの絵を描こうと思って参加した。」、「これまでの絵の展示を見られるのも楽しみ。」、「(ここで知り合った)友達に会えるのが嬉しい。」、「来年も来たい。」といった意見が寄せられた。

## シンポジウム

- 開催日時：令和4年3月12日（土） 午後2時から午後3時30分まで
- 活動場所：東京都立永福学園 多目的スペース
- 参加者数：

一般参加者	教員	合計
3人	3人	6人

※後日、シンポジウムの記録映像をオンデマンド配信

- シンポジスト：本郷 寛 氏（東京藝術大学参与・名誉教授）  
中津川 浩章 氏（アーティスト・アートディレクター）  
伏見 明（本研究会代表・東京都立永福学園校長）
- コーディネーター：中西 晶大 氏（(株)自然堂ディレクター）

- シンポジウムの概要：

第3回ワークショップを3月12日（土）に延期したため、シンポジウムは同日開催となった。

シンポジストがこれまでに創作した作品を見ながら、意見を交わせたのは、効果的であった。



- シンポジストの主な発言：

- ・アニメのキャラクターを描く参加者が多い。本人たちの大切なものを反映している。これを美術ではないと否定してしまうと主体性や創造性の入口をふさいでしまう。社会では、まんが、アニメは位置付いている。社会と教育の乖離を解消する必要がある。国は子供から美術家まで連続的に捉え、美術教育も文化庁の所管となった。
- ・障害のある人の作品を社会につなげる必要がある。評価の規準が、現在形成されてきている。構成力や色遣いなどではなく、心に迫ってくるといったものが評価される傾向にある。大人は余白があると埋めたくなくなるが、魅力的でないものになってしまう。何か足りないということの肯定で、美術教育も変わる。どのような社会を作っていくのか、作品の魅力をアウトプットしての世論形成が重要である。
- ・一方で、学校教育で、筆の使い方、はさみの使い方、糊の使い方といったベースがあるから、自由な表現もできる。そのバランスが重要である。

- 一般参加者の主な発言：

- ・子供が絵を描くときに口出しをしてしまっていたが、これでいいんだと見られるようになった。そうしたら、絵が子供の楽しみになり、生活の中に入ってきた。
- ・この様な自由な空間を求めていた。広い空間で、他の参加者から刺激を得ている。
- ・福祉の場でも、美術活動を取り入れている場所が増えて欲しい。

※これらの発言を受け、本会としても今後も継続して社会への発信に挑みたい。